

## 12 藤浪鑑先生病症記・葬送記及び追悼文集について

○杉立<sup>1)</sup> 義一・杉山<sup>2)</sup> 武敏

京都大学病理学教室には初代教授藤浪鑑の死去前後の様子を伝える絵日記二卷（病症記・葬送記）と葬儀前後の記録及び友人門弟の書翰集二卷（事前及事後其一・二）が保存されている。これらは二代教授清野謙次が恩師追悼のために作製したものである。

藤浪鑑は明治三年十一月二十九日、尾張藩医藤浪萬得の長男として名古屋市久屋町一五九番戸に生まれた。明治二十八年十二月、東京大学医科大学を卒業、四年間ドイツに留学、明治三十三年帰国、直ちに京都大学医科大学教授に就任し病理学教室を創設した。昭和五年十二月停年退官するまで病理学の攻究（日本住血吸虫の研究。実験的動物腫瘍の研究等）と多くの後進の誘掖に力をつくした。その学統は今も生き続けている。昭和九年十一月十

八日、京都市左京区神楽岡六番地の自宅で没した。墓所は名古屋市郊外の日泰寺にある。

藤浪はつとに医学史に関心深く、医学史研究の啓蒙と実践に尽力した。（富士川英郎、岡田靖雄論文、筆者小文参照）これは祖父萬徳、父萬得とつづく学問的、文化的家風（令弟藤浪剛一教授）と本人の天性に基づくことは論をまたないが、青年期からの土肥慶蔵、呉秀三との親交と富士川遊との医史学上の深い交流による所も大であると筆者は考える。

藤浪が十ヶ月にわたる療病生活の後、昭和九年十一月十八日に死去し即日病理解剖が行われた。二十日病理学教室に於て友人、門弟ら三千人が会して（弔電六百通）、遺言により無宗教葬が営まれた。一年後の十年十一月、『藤浪先生追悼録』（先生遺稿、追悼文百十九通）が、さらに十一年五月、『藤浪先生遺影』（全生涯の写真百二十九点）が清野の手により編集発行された。これ以外に冒頭に述べた四卷の巻物仕立の記録集が作られていたことが、最近判明した。

(一) 藤浪先生病症記 半井朴氏絵 昭和九年二月 熊

本で発病以来死去までのスケッチ画四十三図の絵日記、半井朴は東山病院長で藤浪の刎頭の友であり、主治医でもあった。

(二) 藤浪先生葬送記 太田喜二郎氏画、清野の序文につづき、葬儀当日のスケッチ画二十六図。清野と川上漸の書込みが随所にある。

(三) 事前及事後其一、清野による無宗教葬之記。墓誌銘。長与又郎ら友人五氏の書翰。

(四) 事前及事後其二、先生自筆書翰、富士川遊ら友人の書翰十一通。巻末に経歴。

このうち富士川遊の書翰を転載する。

啓啓 先般ハ匆卒之際缺禮致し申候 其節御願申上候 医史學會展覽會之義 來五月二十日之日曜に陳列を了り 二十一日及び二十二日の兩日位展觀を許し候様致度(或ハ十九日陳列を畢りて二十日及び二十一日を展觀日と致す方が宜敷か御賢考を煩はし申候) 令弟剛一君より大略申上呉られ候筈と存し何分宜敷願上申候 講演ハ二十一日と致し申度 小生も「疾病の話」として歴史的事項を講演致申度(幻燈使用) 通俗的で歴史の興味を起すやうな趣味

的な話を致度と考へ居申候 賢契にも何卒通俗的のお話を願ひ上げ度切に懇望致申候 講演會場ハ藤浪、小田両氏より島津之依頼致候趣にて島津の講堂と致候 乍併小生の考としては陳列品の説明を主として史学的の講和は主に學生諸子に対して致し候事も必要に可存しかと愚考致し申候間 會場があれば廿二日か又は二十一日の午後教室にても講話をしてハ如何かと存じ申候 御賢考奉煩候 若し教室にて講演を致す事となれば島津會堂の方は夜分に致し申度候 不取敢右願用のみ 勿々、  
四月二十八日 富士川遊  
藤浪賢契 左右

富士川遊は追悼文のなかで、藤浪の医史学的関心は特に倫理的方面にあり、その道德的態度は儒学の思想に基づくものであると述べている。富士川は藤浪との交流に応えるため、和漢の古医書約一万冊(富士川文庫・京都大学附属図書館蔵)を寄贈した。

(1) 京都医学史研究会

(2) 京都大学医学部病理学教室